

特集・横浜論 ③

座談会 都市横浜を語る

大倉郁雄・小林弘親・菅 孝能・林 英傑・森 義人

一 横浜とのかかわり

森 おはようございます。神奈川新聞の森です。座談会の司会は不慣れで、かえってご迷惑をかけるかもしれません。よろしくお願ひします。まず最初に、横浜とのかかわり合いとか、どこのお生まれか、いつごろから横浜でお仕事をなさっているのか、自己紹介を兼ねて大倉さんからお願いしたいと思います。

大倉 私は横浜生まれではないんですが、日本画家でした祖父のアトリエが大正時代から富岡にあり、母も子供の頃そこで育ち、私も生まれながらに、しょっちゅう遊びに行っておりまし

た。現在は住宅地として開発されていますが当時は、雑木林と小高い丘が続く田園風景で、横浜港に入ってくる欧州航路やアメリカ航路の豪華船が見え、夜はそれらの豪華船のあかりが非常にきれいでした。また、父が当時運輸省船舶課長をしておりましたから、横浜勤務もあり、その関係で、戦前の横浜博覧会を見たり、進水式など何度もついでに行った記憶があります。そのうへ、学校は日吉の慶応でしたので、よくこちらまで足を伸ばしてまいりました。ですから、横浜は故郷のような気がしています。

縁あって高島屋日本橋店から横浜高島屋へ参りまして十一年になりますが、お陰さまで横浜高島屋は来年三十周年になります。

座談会出席者

大倉郁雄（株）横浜高島屋常務取締役兼横浜店長
 小林弘親（横浜商工会議所専務理事）
 菅 孝能（山手総合計画研究所代表取締役）
 林 英傑（ラヴニユウ常務取締役）
 司会・森 義人（神奈川新聞社論説主幹）

実は、私も高島屋と横浜との縁はもともと古く明治三十三年に、関内の弁天通りに飯田高島屋貿易店を開店しております。シルクの貿易等をさせていただいておるのです。そんなことで、何かお役になればと思つて今日は出席させ

ていただいたわけですか。

森 小林さん、お願いします。

小林 私は横浜生まれで、横浜から一時短期間出ましたが、ほとんど横浜で育っています。大倉さんがいわれたように、私も小さいころは、客船が入るとおやじがよく連れていってくれたのです。今でも覚えていますが、小さいころ、船の中に入ったら、船がいつの間にか出ていってしまうのではないかと不安げに歩いた記憶があります。そういう意味では、市民と港というのは当時は切っても切れない関係にあったのですが、戦後、特に最近になると、今の横浜市民で港とのかかわり合いは、港周辺の人ないしは港関係の仕事をしている人ぐらいいなくなってしまったのはちょっと寂しい気がします。

横浜自身が、百三十年前の一寒村から三百万の都市になったわけですね。大半の人はほんとうの意味の地つきの横浜市民ではないだろうということを感じておられるわけですね。幸か不幸か六十年余り横浜で生活し、これからの横浜をいろいろ考えていかなければならない一人だとは思っております。

大倉 小林さんの船の話で思い出したのですが、私は、戦前の大棧橋から旅立った一人でして、まだ小さくてあまり記憶がないのですが、父が香港に転勤になったおりに、船上で母に抱か

れて大棧橋から日本を後にしたわけですね。船は、大洋丸が秩父丸だったと思います。二度ほど往復しています。

森 菅さん、お願いします。

菅 私はこの中では一番の新参者だろうと思いますが、私が横浜と深いかかわりを持ち始めたのは四年ほど前で、根岸の森林公園のそばに都市計画とか建築設計の事務所を持ち、横浜市民の一人になったわけでございます。

それ以前、十年以上前ですが、新本牧の開発が始まるころ、街づくりの仕事を通じて横浜とかかわりを持ち始めて、だんだん縁が深くなってきました。私は、それまで東京で仕事をしていたのですが、東京という大都会の喧騒の中よりも、もう一つ奥に引込むというか、まちなぎわいとは別のものを求めていたわけですね。私には、鎌倉に住んでおります関係で、横浜の魅力としてゆとりが感じられ、そういうゆとりの中で自分の仕事を展開してみたいと思ったわけですね。それは横浜を舞台に仕事をするということだけでなく、自分の仕事の環境として、周りが渦を巻いている場所より、そこからちょっと外れて、そういうところも見ながら仕事をしてみたいと思って、こちらへ参ったわけですね。そこに横浜の魅力を感じてきたわけですが、それが横浜とのかかわりですね。

森 最後になりましたが、林さん、お願いします。

林 生まれは中国の天津で、祖父が華僑の一世で、私が三世に当たります。祖父が日本へ来たのは明治だと聞いております。父が中国へ留学しまして、そこで私が生まれて、革命が起きて香港へ渡り、香港から船に乗って上陸したのが横浜港です。そのとき祖父と祖母が横浜にいまして、元町で商売をやっていましたので、自然の成り行きで家業を継いだわけです。当時は呉服小物売っていただけなのですが、時代とともに現在では婦人服に転業しております。ですから、中国での記憶が残っている部分があり、現在は日本籍になっていのですが、気持ち的には半分外国人、半分日本人という感じですね。



以前、外国籍のときには外国人登録証がありまして、それを見ますと、上陸地が横浜になっている。友達の外国人を見ても、交通機関の発達に伴って、上陸地が横浜というのは珍しい状態です。私自身の記憶では、横浜は何となく羽田や成田といったインターナショナルなイメージがあったのですが、最近では貨物の横浜みたいな印象を持ちながら、横浜で商売をさせていただいで、横浜とのかかわり合いが続いています。

森 何歳のときにいらしたのですか。

林 八歳ぐらいのときです。

二——「横浜らしさ」とは

森 それぞれ横浜とのかかわりを合ってお話しいただいで、皆さん横浜に対する思いが非常に強いことがよくわかりました。

今日の座談会は、「横浜らしさ」、YES（横浜博覧会）以降、横浜の夢という三つの大きな柱で進めたいと思いますが、いずれもこれからの横浜の街づくり絡んでくることで、みんな関連していますから、日ごろ考えておられることを自由にお話し願いたいと思います。

「横浜らしさ」ということですが、私も「横浜らしい都市づくり」とか、まぐら言葉にし

てよく使うのですが、何が横浜らしいのかといわれてみると、案外答えが出てこない。何となくあまいもこととしたイメージぐらいしかなくて、とどのつまり、港とか汽笛とか外人墓地、かつてのよき時代の横浜のイメージを頭に浮かべて、それが横浜らしいということになりがちですが、過去の郷愁にも似たイメージだけで横浜らしいといっているのでは、これからの新しい横浜はつくり出せないのではないか。「横浜らしい」というまぐら言葉は、誰でも使う、使いやすい言葉ですが、その辺、皆さんのお考えを聞きながら、漠然としたイメージをもう少し固めてみたいという意味で、「横浜らしさ」というのを取り上げたわけです。

横浜の魅力に引かれて四年前にいらした菅さん、今いわれたことをもう少し具体的に。

横浜の魅力

菅 多少皮肉っぽくいきますと、横浜らしさがあるとと思っている、あるいは横浜らしさがあるということ自体が、「横浜らしさ」ではないかという気もします。ほかのまちへ行くと、そのまちらしいもの、あるいは「この特産は何ですか」というと、「いやあー」といって首をかしげるところの方が多くなっています。けれども、横浜は、何かというと「横浜らしい」と

いうあたりが一つの魅力ではないでしょうか。

横浜らしさは情報発信

菅 このごろよくいわれていることといえば、自分のところから何か情報をいつでも発信している、それが横浜らしさだろうと思います。横浜ができたそもそものが、文明開化のまちで、西洋の先端文明を日本の中に発信する中継基地であつたわけですが、そういう伝統はまちの構造としても消えていかないだろうと思うのです。

私の仕事に関連していえば、横浜で街づくりを行政が中心になって進めている。例えば馬車道のプロムナード、ああいうものを全国に先駆けてやったというあたりは、できたものそのものが横浜らしいというより、ああいうものを最初にやって、世の中に自分のところが一番にやっただと声高にいえる、それが横浜らしさというものではないだろうか。そういう意味では、常に新しいものに挑戦していく姿勢を持ち続けていることが、横浜らしさの中にあるのではないかなと思うのです。

空間的な意味では、横浜は東京の隣にありながらも東京に巻き込まれてない部分を持っているゆとりがある。これは、二番手にあるという意味でのゆとりかもしれないけれども、必ずしもそれを横浜の人は負い目には感じてないの



はないか。むしろ、東京の中でやっているより、横浜で時代の最先端でなくて、ちょっとそこから外している。それをかなり意識してやっているのではないかな、という感じもするのですが、その辺も横浜らしさではないかと思えます。森 横浜が東京より進んでいるという自負を持っている人も案外いるような気もするのですが、それをゆとりというのでしょうか。

大倉さんは情報発信のことについて、いかがですか。

大倉 私ども百貨店の目からいわせて頂きます。横浜は人口も急増し、はたから見ますと、港があり、異国情緒があつて、カモメが飛んでいて、しゃれていて……、そんな文化の発信基地となるわけですが、実際は、横浜市の人口三

百十五万人は、他府県からの移住の方が非常に多いですし、また海寄りよりも奥の方に住んでいる方が大多数です。ですから横浜らしさといつても、横浜市民でないような感情というか、意識をお持ちで、まだまだ横浜市民という郷土意識が芽生えていないと思うのです。

三年前に、神奈川新聞さんにイメージ広告で「横浜始めて物語をやるうよ」ともちかけました。大人は勿論、幼稚園、小学校の子供達へ、横浜はこういう時代に、こういうふうなことで海外から文化なり情報を受信し、日本の新しい文化として情報発信した都市であることを伝えたいと思ったからです。例えば、アイスクリーム・石鹸・ビール・ガス灯など、一つずつテーマを取り上げて、日本で最初に作られたり、販売されたのは横浜であることを紹介しています。商売ですから、石鹸もアイスクリームも売っておりますし……。

こんなことで横浜のステイタスと郷土意識の高揚のお役に立ちたいと願っているわけです。

横浜を代表するみやげ

大倉 市長さんとか商工会議所の上野会頭から、「外国へ出かけたなり、向こうからお客様が見えた時、横浜の記念品をさしあげようと思つても、何もないじゃないの。あなたの所へ

行つても、スカーフでも横文字のついているものしかないじゃないか、横浜と書いてあるものもないし、高島屋というのもないよ」といわれ、はたと詰まってしまった。これはいけないと思いました。

それでは、スーベニアではなく、「横浜らしさ」とは一体何だろうということになるわけですが、「らしさ」というのは、そこに生活している人々の中から、何かひとつのものが生まれてくる、それが「らしさ」につながるわけですね。つまり、私どもが、例えば高島屋らしさとか高島屋オリジナルを作りますと、それを強調するあまり、一人よがりのものが多くなる危険があります。私は「らしさ」は自然に発生してくるものと考えています。

そんなことで、横浜の「らしさ」をコンセプトとした「横浜倶楽部」というブランド商品を育てようということになったのです。最初はどうしても、カモメが飛んでいたり、外人墓地が出てきたり、船が浮いたりしたイメージのプランが出てきました。しかし、「これらは、日本国内なら「横浜らしさ」かもしれないけれども、外国へ持っていったら、海と船は横浜だけのイメージではない」というのでとり止めました。

そこでネクタイにしても、スカーフにしても、横浜の人たちが好んで毎日つけられる感覚のもの

のを、今つくりつつあるわけです。いろいろなアイテムが増えまして、とうとうこの間、ウイスキーまでつくりまして「横浜倶楽部」というラベルを付けましたら、「どこの倶楽部のウイスキーですか？」と尋ねられてしまいました。

市民の皆さんは、横浜の記念品とかおみやげにかなり困っておられるようなので、こうした商品が評判もよく、育つならば「横浜倶楽部」でワンフロアをつくりたいと思っっているくらいです。

そんなことで、地元の皆様にも何か貢献できないかなと願っております。

森 「横浜を代表するもの」といわれると確かにピンとこない、そのとおりではないかという気もするのですが、そういうことを踏まえて林さんはどうですか。

神戸では

林 八月末に所用で神戸へ行ったのですが、神戸を見てみると、港があって、大阪から一時間で神戸市内とか、ロケーション的には横浜と非常に似ています。

神戸で目にとまったものに、同じおみやげでも「神戸」と全部書いてある。横浜でも売っている同じ品物でも、必ず「神戸」とプリントしてあるんです。せっかく神戸に来ただか

らおみやげ屋さんで「神戸」と、片仮名か漢字で印刷されたものを買おうと思ったら、みんな書いてあります。横浜に戻りまして山下公園の通りを見ましたら、同じ人形を売っていても、そこは白紙です。横浜の場合は印刷されてない。つい二、三週間前の話ですから、非常に実感としてわいてきます。

大倉さんがいわれたように、お客さんが来たので横浜のおみやげを持たそうとすると、シェウマイしかない。シェウマイとかおまんじゅうが横浜のみやげなのか、という気がします。

それと横浜では、絵葉書をどこで売ってるのかわからない。どこの都市へ行っても絵はがきがあります。我々地元に住んでいながら、絵はがきを買おうと思っても、どこへ行っても買っていないかわからない。市役所へ行けばあるのでしょうが、絵はがきは外部から来た方の手にはまず入らない。どこの都市にもあるものが、横浜には不思議にないのです。

横浜らしさは、実績を生かして

林 横浜らしさについては、こんなことを考えています。アイスクリームにしても、クリーンングにしても、パンにしても、ビールにしても、横浜が事始めというのがたくさんありますが、それが今でもまだ残っているかというと、地元

ではほとんど衰退していつているわけですね。それを意識するしないにかかわらず、横浜市民としてはみんなが残念に思っていると思います。それが郷愁というか、過去に栄光があったから、その栄光をもう一度という気がするのです。

ですから横浜は、国際都市横浜とおっしゃる方もいるし、観光都市横浜だとおっしゃる方もいるし、貿易都市横浜だとおっしゃる方もありますが、これをどういうふう融合するなり、方向づけするなりして発展させていくかを考えなくてはいけないと思います。横浜らしさは、自然発生的にでなく、仕掛けとしてこれからは行政も交えてつくり上げていくものじゃないかと思っっています。過去の実績を踏まえながらですが、栄光を追うのではなく。

横浜らしさがどんどん消えていくから、危機感を持っていますが、一方、横浜らしさというのが最近とみに出てきているような気がします。それが横浜人のいいところであって、普通だったらそのまま押し流されて消えていってしまうのですが、それをこれからどういうふうにするかでしょうね。

情報発信基地として

大倉 お客様を通じて横浜人を見ていますと、

好奇心は旺盛だし、生活基盤もはっきりしているし、自己主張もきちんと持っておられるわけです。世界の動きより、隣の東京を非常に気にしているけれども、そうかといって、そう感化はされない。東京でいろいろなことがあって、情報発信があっても、自分の方は東京と違うという形でとらえているから、ファッションにしても、東京のトップファッションとか最新の情報について敏感だけれども、動きが遅いわけです。ただし、これはいけるぞというファッションについてはキチンと受けとめて、新しい発信を、またなされるわけです。

そんなことで、情報の超先端発信地は、ファッションについては東京ですが、それを横浜なりに解釈して、横浜のレンズを通してもう少し高度な情報を再発信する、これを横浜の「成熟発信」と、私もは言っています。

東京の場合には何でも新しいものを発信しますから、たいして役に立たない情報もあるわけです。六本木とか原宿で何か発信しますと、非常に受けて、一世を風靡しているかのごとく見えるのですが、実際には、日本中のそういう関係者が集まって、ただ騒いでいるだけで、情報発信だけにとどまって、生活には入っていかないわけです。それを横浜がうまくとらえているのではないか。むしろ横浜の発信というのは、

国内への発信より、これからは国外に向かって発信することだと考えます。

だから、ファッションにしても、国内より外国に向かって横浜ファッションを打ち出すべきだろうと思います。東京が何か情報発信すると地方の人がばーっと集まって来ますから、原宿でも六本木でもローカルムードで満ち満ちてしまっています。東京の連中は嫌気がさしているわけです。横浜が再発信しますと、そこへ成熟東京人が集まって来ます。いい例が、この間のペイサイドクラブのオープンです。やって来た車の半分が東京ナンバーなんです。気のきいた連中は横浜へ来るわけですから、それが横浜の新しい魅力で、これが「横浜らしさ」ではないか。東京の情報発信とは違う横浜の成熟発信から生まれた「横浜らしさ」だと思っております。ですから、今後はファッションとか遊びとか、都市計画にしても、東京で出来ないことがいっぱい出来ると思うのです。

さきほど林さんが背景が神戸に似ているとおっしゃいましたが、僕は横浜の方が神戸より背景はもっとおもしろいとも考えています。というのは「みなとみらい21」が出来て、そこへ世界中の人々が集まって来る。ご主人方は昼間会議やビジネスだけれども、ご家族はどこで過ごすかという、すぐ隣に鎌倉あり、葉

山あり、富士・箱根が控えています。これは、「横浜らしさ」の大きな要素として組み込むべきです。東京など問題にならない、強力なメリックトです。

らしさがないのが「横浜らしさ」

森 横浜生まれ、横浜育ちの小林さん、聞いてみると、横浜を代表するおやみげもないという話も出ましたが、いかがですか。

小林 結論をいうと、らしさのないのが「横浜らしさ」ではないかと思っています。というのは、百三十年前まで一寒村のところが現在のようになっているということは、この間にいろいろなものが取り入れられてきて、今のよう状況になっていると思うのです。

先ほどのお話にありましたように、横浜は事始め、物の始めが数限りなくあるわけで、そういう意味では、その時代に応じて新しいものが横浜から発信されていったわけです。戦後でも、元町も含めて、若い人に対するファッションも、例えばハマトラとか、その時代に応じていろいろなものが出ていつているけれども、「らしさ」というと何もないのがらしさだと思っております。それだけにこれからのいろいろなものが受け入れられるし、いろいろなものを出していけるという意味で、その辺の「らしさ」はマイナスでも



あり、プラスであるけれども、それをプラスに
していくのがこれから一番重要ではないかと思
うのです。

さつき神戸の話が出ましたが、神戸との違い
で、まさにそうだなと思うのは、横浜と比べて
郷土意識が強いという点です。神戸ではいろい
ろなものに「神戸」と書いてあるのは、郷土
意識が強いからだと思います。逆にいうと横浜
は郷土意識が低いわけです。しかし、低い郷土
意識をプラスに転化することも重要です。何で
も受け入れられるという意味では、一つの意識
にこり固まっているより、これからは何でも受
け入れていくことが大事な要素ではないか。
せっかくの要素をプラスにしていくなきではな
いかという気がするのです。

ターゲットをどこにしぼるかでは、国内でな
く国外にターゲットをしぼって、横浜をいろい
ろな情報発信の場にすることもあるし、若
い人、年輩者といった年齢的な対象もあるし、
いろいろと選択のできる自由度を持っているの
が「横浜らしさ」ではないかという感じがする。
過去に新しいものを発信していたので、これか
らは東京にない、または神戸にもない何かを横
浜から発信していくことが、今の「横浜らしさ」
を生かしていく意味で大きな要素のような気が
しています。

郷土意識の低さは、どこからくるのか

森 郷土意識が低いというのは、よそから入っ
てくるからです。

小林 横浜の人口が、百三十年の間に三百十五
万人になったというのには別にしても、昭和二十
年当時には、六十二万人しかなかったのが、今
では約五倍になっています。そのうち自然増は
二、三割だろうと思うので、ほとんどの人が全
国各地から集まってきているわけです。もとも
と横浜自身がそういう成り立ちですから、国際
的な見方をすれば、外国人に対しても余り拒否
反応もないし、他府県から来た人も簡単に受け
入れる。それだけに横浜固有の感覚が比較的少
ないのではないか。これは物理的な影響もかな

り大きいと思うのですが、それが逆に一つの魅
力ではないかという気がします。

森 確かに横浜には地方のような排他的などこ
ろはないですね。

小林 ないですね。

森 それを返せば、郷土意識が低いことに
もつながってくるのかもわかりませんね。

大倉 他府県から来て横浜が郷土でない人たち
がほとんどですから、それだけに郷土意識をこ
れから育てていかなければいけないわけです
ね。それは何だろうかという点、表から見ると
浜のイメージをもっと植えつけていくことだと
思います。だから、横浜の生い立ちから歴史を、
幼稚園、小学校のときから横浜の市民の教育の
中に入れていく。それが知らず知らずのうちに
横浜の一つの形になって、全国に発信してい
くのだろうと思うのです。そういうことを一つ一
つ重ねていかなければいけないのではないかと
思っています。

小林 前に、横浜に住んでいる人へのアンケー
トで、横浜にこれからも住みたいという人が相
当のウエイトを占めていましたね。そういう意
味では、横浜は人を受け入れる環境とか、もろ
もろのものが備わっていることはいえる
と思います。他府県から来られた人でも、横浜
に住んでみたら、横浜にこれからもずっと住み

たいという人が多いということは、それなりのよさがあるわけで、そういうものをどう発展させていくかがこれからの課題ではないかと思えますね。

大倉 東京湾を半分に切って、西か東かというアンケートを出せば、九九%が「西に住みたい」とおっしゃると思いますね。

森 住みたいのはいけれども、東京のベッドタウンとして住みたいというのでは困る気もするので、その辺がこれからの大きな課題でしょうね。

小林 もう一つ、今の若い人に郷土意識がほんとはあるのかどうか疑問を感じているわけですね。例えば、横浜市長の名前とか、人口とか区の数とかは、正確でないまでも、ある程度までは知っていてもいいですね。一番驚いたのは、あるとき、若い人何人かに横浜市の人口はどのくらいかとたずねたら、一人から一千万人まで答えがあって、三百万人は一人だけでした。日常の地元の関心が薄いというか、人口なんか別に勉強しなくても、何かで、例えば新聞など見ていけば分かるという気がする。少なくとも何百万の桁ぐらいであってほしいという感じがしました。横浜の都市そのものが、北の方は東京向けの開発になって、その周辺については、古い人は、都心と緑区、瀬谷区という

と何か感覚が違う。今盛んにいわれている一極集中でなく、緑区は緑区、瀬谷区は瀬谷区の「横浜らしさ」がこれから必要ではないか。そういう中で、地元に着して少なくとも郷土のもろもろについて、常識的なことがわかっていて、生活していったほうがいいという気がします。

郷土意識は地域地域の魅力から

菅 今まで横浜というと、港という言葉に代表されるイメージがあって、それで大体了解されてきました。けれども、横浜に住んでいながら、横浜市民でないという意識を持っている人もたくさん住んでいます。緑区あたりに住んでいる方は、関内よりも渋谷の方を向いていて「横浜都民」と思っているし、中区や西区に住んでいる人の中には、あそこ（緑区）は横浜だと思っていない人もいるわけで、そういう意識をこれからどうしていくか、ということも大切だろうと思うのです。

横浜らしさというか、横浜の帰属意識をどのように持たせるかといった場合に、「ミナト・ヨコハマ」というイメージは対外的にも必要ですし、横浜全体にとってもある意味では必要だろうと思いますが、それだけでこれからもいくのかというと、多分それはだめだろうという感じがします。そうではなくて、緑区なら緑区と

しての魅力というか、自分はそのかに住んでみたとか、そこに住んでいることで横浜に住んでいると思わせる何かが必要になってくるのではないかと。それをこれからつくり出していかなくてはいいと思います。

今まではそうではなくて、中区とか西区という横浜のバツと光る部分があって、あとはその他大勢です。その他大勢ではなくて、それぞれが自分が主役だと思いうような街づくりをしなれば多分だめではないか。緑区あたりに住んでいる方は、「港」といっても、聞いてはいるとか、年に何遍か行ってみるとい感じになってきているわけだから、そういうところをこれから考えていくと、もっと厚みが出てくるだろうと思うのです。



林 今の意見と同意見です。子供のころから中区と西区からあまり出たことがありませんが、中学ぐらいのときに、友達が戸塚区にいたので遊びに行ってみて、ここが横浜かな、よっぽど遠くへ来たんだなと思った記憶がまだ残っています。大人になった現在、緑区に行くと、ここは横浜じゃないという錯覚に陥ることがあります。

港ということを経区あたりの方はあまり意識してないでしょうし、同じ横浜の中でもあまりにも交通が不便なので、同じ市の中を中区から緑区へ行くよりも、東京へ行った方が近いのではないかとこの状況です。緑区の方は港へ来るより、港といったら東京港の方が近いのではないかとこの気がするのです。緑区では、今まちがどんどん発展していますが、街づくりの手法も東京ナイズされているというか、または東京のベッドタウンのような街づくりという感じがします。この辺の町並みとは違います。

本来ならば、中区、西区あたりで外へ向かって膨張していかなければいけないものが、外からどんどん追い詰められ侵食され、包囲されているという気がします。

横浜博覧会の意義

大倉 今度の横浜博覧会は、そういう意味では

すばらしい機会になるのではないのでしょうか。海がすぐそばにあるわけでもなく、港も近くにないのに「横浜市」になっている地域が多いわけですから、この機会に横浜全体を子供たちによく見て貰いたい。郷土を勉強する機会が増えますから、いろいろな意味で今度の博覧会は大変な意義があるだろうと思います。そんなことで、私ももちろんど開店三十周年にあたり何かお役に立ちたいと決意して、パビリオンを単独で出させていただくことになりました。ファミリーでお楽しみいただける内容にして、一度でなく二度も三度も博覧会にご来場いただけるように、全社員英知をしょうりました。横浜博覧会は大変いい機会だと思います。

小林 博覧会には、もちろん全国、世界から来てもらいたいけれども、少なくとも横浜市民には何回か見てもらいいたいですね。

というのは今でも緑区の地の古い人は、都心に出てくるのに「横浜へ行く」というんです。横浜は明治から大正にかけて町村合併で広がってきましたが、横浜に住んでいながら都心を「横浜」という。自分も横浜なのに、やっぱり緑区何々町なんですね。

もう一つは、都市構造上の問題が、非常に大きな問題としてあります。緑区は田園都市線の政策的な開発ともいえると思うのですが、そう

いう意味でいうと「横浜都民」であって、今でもそういう率が高いと思うのですが、横浜版の新聞はあまり売れない。田園都市線の沿線では東京版がかなり出ています。

都市骨格の整備を

森 東京へ目が向くのは、働く場が東京にあることもあるのですが、魅力が大きいんですね。

小林 昼夜間人口比が示しているように、あまりに東京に近いことと、東京にあらゆるものが集中し過ぎて、機能は東京に集中しているけれども、生活の場は外へ出ていった、最たるものが横浜だろうと思うのです。

林 それについて機会あることに話したりするのですが、横浜に本社機能があまりにも少ない。今回の横浜博覧会にしても、高島屋さんが、横浜の企業が単独でパビリオンをつくるのは、横浜市民としては非常に名誉なことだと思うのです。日立とかNECなど、大企業がパビリオンをつくるのですが、これで横浜博覧会なのかなという思いで、一市民として残念な部分があります。一つの町単位でも何とかならないのかと、元町の商店街でも横浜博覧会の出店を検討したのですが、残念ながら財力が足らなくてできないのが現状です。横浜博覧会へ行くと、県とか

市で横浜の生い立ちを紹介するコーナーができませんが、高島屋さんも横浜ですから横浜色を出していただけるだろうけれども、横浜以外のハイテク産業などが、テーマは横浜であっても、東京のPRが何割か出てきてしまうのは残念というかもったいないというか、これが現実かなという気がします。

本社がどんどん東京へ引越していくのは、交通の不便や、首都高速道路にしても建設が遅かったからだと、僕が高校生ぐらいのとき聞いた話です。細郷さんになってやっと本格的に動き出したという状態ですね。シェル石油の知り合いに聞くと、「シェルも横浜にいたかったが、あまりにも不便だから東京に移動したといういきさつがある」と言っていた。そういう話を聞くと非常に残念です。都市としての整備をしないと、せっかく事始めしても、それをよそに取られてしまうのではないか。

これを中国と比較してみると、紙は中国で発明されたけれども、今、紙の品質でいえば、中国は非常に悪い。羅針盤も中国で発明されたのに、羅針盤の発展であるレーダー技術が非常に遅れているわけです。横浜も、後の発展と結びつく人材なり環境なりが遅れ、十年ぐらい遅れているのではないか。十年というとなんかに遅くないのですが、戦後四十年のうちの十年です。

から大きな違いとなって出てきてしまう。そのツケが回ってきているのではないかという気がします。

道路の整備を

大倉 道路をかなり整備しないと、どうにもならないですね。例えば緑区からここへ出て来ようと思っても、港北ニュータウンの中を抜ける道路がありますが、既に通れないくらい渋滞しておりますし、インターチェンジも動かない。昨日も東京への往復だけで五時間かかってしまった。東京と横浜の間を往復して五時間もかかったのではどうにもならないわけで、ベイブリッジが完成すれば多少便利になるでしょうが、別に東京方面への直行バーンをつくればもつと円滑になるような気がします。

今の時代は車なしには考えられない時代ですから、よそから皆さんに来ていただくと思っただら、それなりの準備をしないとイケないのではないのでしょうか。全国に情報発信をし、注目してもらいたい都市を發展させようと思えば、都市機能として必要なものは完備しないと片手落ちになると思います。

空港への直行道路、これも絶対に必要です。新幹線は、おかげさまでたくさん停車するようになりました。それと、地下鉄が早く緑区に出

来ること。東京へのバイパスがどんなことがあっても出来なければ、「みなとみらい21」の首都圏における存在意義は下がると思います。

森 つい「横浜らしさ」というイメージだけで勝負しようとするけれども、その背景に都市の骨格をきちんとつくっておかないと、イメージだけでは本物の「横浜らしさ」は生まれないと気がもしますね。

横浜らしさの厚みは、郊外部の魅力づくりから森 菅さん、港だけにこだわらないで、いろいろな「横浜らしさ」を持たせて、厚みをつけるべきだといわれましたが、港以外に何があるか、その辺はどうでしょうか。



菅 いろいろあるだろうと思います。前に、横

浜の都心部以外の部分をどんなアイデンティティでまとめていったらいいのか調べたことがあります。そのとき考えたのは、今の区の単位ぐらいで何かつくった方がいいのか、もっと小さくするのか、幾つかの区を集めて魅力をつくった方がいいのか、いろいろな考え方があります。そのときの僕の考えでは、都心部のアイデンティティは港ということで、それが非常に強烈で、それにある程度対抗できるアイデンティティをつくりだすには、区の単位では若干弱いかないということで、五つぐらいにグループに分けてみました。

北からいくと、一つは新横浜を中心にしたあたりで、あそこは鶴見川という地形的な財産がある。それと新横浜という交通の拠点を組み合わせて、何か魅力をつくれなにか。狭い新横浜の平場があつて、水に面していて、すぐ裏に小机城址も含めて丘陵部があるわけですが、これは横浜の都心部と相似のようなイメージがあるのではないのでしょうか。

次は緑区の国道246号線や港北ニュータウンを中心とした新しい横浜があると思います。西に来ると三保・新治の丘と保土ヶ谷カントリーから瀬谷・矢指に向かう丘の二つの緑のまとまりがあつて、間に帷子川の谷が入り込んで、八王子に抜ける絹の道が昔あつたわけですが、

こうした自然環境をそのアイデンティティとして大切にすべきだろう。

もう一つは戸塚。阿久和川を始めとする小河川と、道筋がからみあつて、まさに街（ちまた）を形成しています。戸塚の駅前にも柏尾川という自然の財産があります。それから金沢の海と円海山、そこには、中世以来の歴史がありますし、金沢八景の駅前には海に面しているという個性をもっています。

こうした財産を、それぞれの区がそれを大切にして、そこでの都心機能とうまく連携させる街づくりを行っていくと、それぞれに個性が生まれてくるのではないかと考えて、提案したことがあります。少し大きな玉をつくり出していないか、それを手がかりに郊外部といわれている部分の街づくりを進めて、それぞれの都心の骨格をつくっていくことが大切かなと思っています。

プライドを持って、新しい個性を

森 今までの話を聞いていると、林さんがおっしゃったように、港という過去の栄光だけに目を向けていると新しい個性がこれから出てこないのではないかと、確かに私もそういう気がしません。

林 過去の栄光というより、過去の栄光のプラ

イドを持ち続けながら、そのプライドに立ってつくり上げていくべきでしょうね。現在そのプライドを持っているのは三百万人のうちのどのくらいいるのか、それが将来の横浜にとって重要なところになってくるといえます。郷土愛の中に横浜市民であるプライドをどのくらい持っていたか、それが横浜の発展に大分関係してくるんじゃないかと思っています。

森 どれだけプライドを持っているか、疑問に思う点もありますね。

菅 自分のライフスタイルに自信を持っているのが一つの横浜人らしさということになると思いますが、自分が住んでいるところ、例えば瀬谷なら瀬谷でもいいのですが、そういうところに住んでいることに対して、自分のライフスタイルとしてどれだけ自信を持てるかということだろうし、自信を持たせる基盤づくりが都市計画としては必要だろうと思うのです。

そのときに、どこでも同じようなものをつくるのではなくて、瀬谷は田舎だけれども、田舎のよさがあるんだというものをつくって、それを通して横浜に住んでいるという帰属意識を持たせればよい。直接横浜だというふうに一遍に広げる必要はないのではないかと。それには横浜は広すぎるから、もっと狭く、瀬谷ということにろに住みたいと思つて住んでいる、そういう気

持ちにさせれば横浜に住んでいるという気持ちにつながっていくんだらうと思っています。それをどうつくっていくかが大切で、そこが都市計画の役割だらうと思います。

森 三百万人の大都市になると、一つのイメージだけですべてを語るといのは物理的にできないことです。まあ、横浜らしさに結論はないですけど。

三——YES（横浜博覧会）以後の横浜は

森 YESの話も出ていましたが、「今、YES後の話をするなんてとんでもない」といわれそうですが、みんながYESといっているときに少し冷静な目で、YESの後はどうすべきかを考えてみるのも決してむだではないと思います。YESに全力投球していると、終わったらがつくりするのではないかという気もするので、ポストYESについても考えておきたいと思っただけですが、小林さんは「とんでもない」という方ですか。

小林 博覧会というイベントは、経済も含めて都市発展の一つのきっかけで、これが目的ではないのです。博覧会だけが目的であっては意味がないわけで、博覧会が一つのきっかけになって、横浜が大きく飛躍すべきだと考えます。

そういう意味で、現在は博覧会を成功させ、いい博覧会にすることは重要であるけれども、その反面、博覧会が終わったらすぐに「みなとみらい21」をどうするか、具体的に煮詰めていく必要があるだらうと思う。それでないと、せっかくの博覧会が終わったら火が消えて、当分の間何にもないのでは、何のためにやった博覧会だということになると思います。博覧会の前、時期で発言は難しいところではあるけれども、博覧会自身は一つのきっかけとしていくべきであると思います。

横浜にとつての博覧会とは

小林 一番問題なのは、今まで「横浜らしさ」についていろいろな話をされていますが、博覧会をこれからの「横浜らしさ」をつくる一つの核にすべきだと思う。そういう意味で、博覧会が横浜にとつて、横浜市民にとつて、横浜経済にとつて何だったんだらう、ということでは具合が悪いだらうと思います。

先ほど林さんが、大手企業がほとんど入っているといわれましたが、横浜の企業にも横浜市民にも、横浜の博覧会だったということを是非残したいと思っ、博覧会協会ともいろいろ話をしました。本来ならもう少し横浜の企業が出店して、横浜にもこういうものがあつたのかと、

横浜市民に知ってもらうことも重要だという気がします。博覧会全体から見ると難しい問題ですが、私自身も横浜の企業に何らかの形で、中小企業であっても参加できる場をつくるべきだということ、開港記念村の中の建物を商工会議所が借りて、それを細かく割って、出られる人には参加の機会を与えることを考えたわけですが、これは市の方にも博覧会協会にも協力していただきました。

そういう中で、博覧会が終わったらどうするのか。これも博覧会と同じことになってしまつたのでは、「みなとみらい21」計画そのものも、横浜市民なり市の経済界にとつて何のプラスもないということではまずいと思う。それで、ポスト博覧会ということ、少なくとも土地を確保してくださいと市の方に話をしていきます。それでないと、でき上がってみたら東京の大手企業しかあそこの中に入っていないことになってしまう。これは決してマイナスという意味ではないのですが、横浜の企業、横浜の経済にとつては、よそから入ってきて活力は出たかもわからないけれども、我々にとつて何にもメリットがないということであつては失敗といわざるを得ないのではないか。そういう意味で、どういう手段、どういう形でやっていくかが一番頭の痛い、しかも大きな問題だらうと思います。

これはいろいろな人と話をしても、たまたま三菱地所がランドマークタワー構想を出したとき、あそこに事務所を開いたら平米幾らだろうという話の中で、東京で居を構えている企業にとつては、現在東京で十を払っているのにランドマークタワーなら五で済む、これは安いという感覚です。横浜で事業を営んでいる人は現在二でやっている、五では随分高いという、その違いは非常に大きいと思う。その辺のギャップをどうやって埋めるかが大きな問題ではないかと思えます。

確かに地価の高騰がプラスなのかマイナスののか、難しいところではあるけれども、東京の人たちにとつてみれば、今の東京の都心部の環境から考えれば、「みなとみらい21」の中にぜひ進出したい。経費的にも安くできるし、環境もはるかにいい。ところが、横浜の人にとつてみれば、環境はいいかもわからないけれども、我々には手が届かない。博覧会と同じような結果になったのでは、「横浜らしさ」がまさにわからない「らしさ」になってしまうですね。

これは是非、博覧会が始まる前から、今から我々も検討したり、知恵を出し合い、皆さんにいろいろ聞いているのですが、これから全体の問題として真剣に考えていく大きな問題だろうと思えます。極端にいうと、これから二十一世

紀に向かつての横浜の一つの行き方の方向づけができてしまう時期ではないかと思つています。

博覧会を、二十一世紀に向かつての開港へ

森 大倉さんはどうですか。

大倉 博覧会が終わると、本当の意味で、二十一世紀へ向かつての横浜の開港だと思つてのです。そして「みなとみらい21」が大きな活力となって、情報発信の場となっていくわけです。

しかし問題なのは、横浜だけが「みなとみらい21」をやっているわけではないということです。東京湾全体が二十一世紀に向かつて始動しているわけでして、もちろん千葉もやっていますし、東京もムキになってやっています。そうすると、重複するところが必ず出てきます。大局的に見れば、無駄な面も随分あると思うわけです。ですから、おのずから横浜と東京と千葉の役割は違ってくるのではないのでしょうか。

そういう意味で、横浜は何をしたらいいのか。これからは情報社会ということになるし、通産なり郵政なり国の機能自体を横浜へ引越して来てもらうことはどうでしょうか。つまりコンベンションあり、情報あり、経済あり、ホテルありといった「みなとみらい21」の設計図をひくわけです。通産と郵政が横浜、東京に何、千

葉は何と、そのくらいのスケールで考えていけばいいのではないのでしょうか。

「みなとみらい21」については、昼間の人口と夜間の人口があまりにも差があることです。最初は、住宅機能が同居していなければいけないという気もしていたのですが。

しかし、「みなとみらい21」の機能と住宅を一緒に結びつけるのは、「みなとみらい21」なり、その街が発展していく上でバランスがとれないのではないかと。五年たち十年たつと、住んでいる人と街がアンバランスになるのではないかと。いう気も最近してきたのです。つまり、高齢化社会になり住んでいる人は変わらず、街は発展していてもバランスがとれなくなってしまいます。ですから、住宅は必要ですけれども、世界中から集まる人、日本中から集まる人の住宅という意味で、レンタル形式で「みなとみらい21」に、あるいは、山の地域に高層住宅を建てたらどうでしょうか。そうすれば、横浜の力というか、情報発信の場として、「みなとみらい21」が、長期にわたって活力を失わずに発展していくのではないのでしょうか。

森 横浜にみると、「みなとみらい21」だけが大规模開発のような錯覚に陥りますが、同じようなことをあっちでもこっちでもやっている。もう少し高いところから東京湾を俯瞰的に眺め

ると、「みなとみらい21」だけに脚光が集まらないのではないかと、不安な気もしたりする。東京そのものが、機能分散とかんとかいながら、もつと機能を集積しようという魂胆も見え隠れしていますから、今おっしゃった機能を思い切って持ってこれるかどうか、不安な点がありますね。

大倉 まず道路をつくること、そうすれば時間の短縮ができます。そして、官庁の機能を持つてくれば、完璧にできると思いますね。仙台とか、どこどこへ都を移すとかいっていますが、そんなことよりずっと早いし、現実性はありませんね。

ミニ東京でなく横浜にしかないものを

小林 「みなとみらい21」も、東京対横浜、千葉対横浜という考えはこれから成り立たないだろうという気がします。そうでなくて、今いわれている東京圏の中ではっきりした機能分担をしたほうがよい。これは非常に難しいと思うのですが、ミニ東京を持つてきても意味ないのではないか。東京ではこれから伸びられないもの、それを横浜で伸ばすということでないか、ポスト博覧会も行き詰まる感じがする。「みなとみらい21」へ企業を集めればよいということではなくて、一つの方向づけを固めながら、その機能

は横浜でなければ成り立たない、横浜へ行かなければそれはわからないというくらいに持つていくべきだろう。それが何なのかは非常に難しいと思います。ミニ東京をあそこへつくっても、今までの東京の蓄積は一朝一夕に変わるものではないだろうと思うのです。

横浜にとって一番大きな力になるのは、情報は横浜でないとれないということになれば、他のことは自然に解決していくのではないだろうか。そういう意味で国際会議場が大きな力だろうという気がします。

横浜の機能については、いくつか問題があります。横浜市内にある企業でも、実際の仕事は東京になってしまう。というのは、機械的に入ってくる情報でなく、「人と人の交流は東京へ行かないとできない」と言うのです。例えば夜ホテルへ泊まるにしても、横浜のホテルへ泊まっていたら、そのかわいの人たちとしか接触できない。ところが、東京のホテルへ泊まっていたら、隣のホテルにいる仕事関係の人との晩に話ができる。これも横浜で考えるべき方向だろうと思いました。

外国人が今、東京で非常に住みにくくなっていると思うので、外国人企業者が住みいいまちをつくることも一つの要素になるのではないかと。そういう意味で、横浜は外国人が住みやす

い環境はかなり持っていると思うので、外国人が、日本だったら横浜に住みたい、それでは仕事も横浜でということにつながるのではないかと。小さな問題かもわからないけれども、外国人が住みやすい環境をつくること。環境は建物の問題でもあれば、もつと端的にいえば家賃がどのくらいかということ。東京より横浜の方がはるかに住みやすいという意味での環境づくりが大きな要素を占めてくる、という気がします。

森 林さんはどうですか。

林 「みなとみらい21」に関しては、とにかく交通を考えて、整備していただきたいことと、小林さんがおっしゃったように、ミニ東京を持つてきてもしようがないというのは同感です。

私の個人的な理想でいきますと、あそこにミニ東京でなく、東京を上回る真の国際都市にするために、横浜の表玄関を「みなとみらい21」地区に全部移していく。もちろん、東京の本社機能、官庁を集約できればそれにこしたことはないのですが、ミニ東京に終わることなく、世界に目を向ける地域にしていきたいと願っています。

森 ミニ東京程度で活性化するだろうと安易に考えている向きもなきにしもあらずで、何とな

く東京的なものを持ってきて、まちらしいまちをつくってあげばそれでもいいという、それだけではどうしようもないという気がしますね。

地元重点を置いた方向を

林 五〇%にはいかないまでも、少なくとも三〇%ぐらいは横浜人の活躍の場が欲しいですね。現在の状況を想像すると、横浜の中にあっても横浜人はなかなか活躍できないというイメージを受ける。都市も発展して、市民も一緒に発展していくべきでしょうね。今地方都市で大企業を誘致して、それだけで終わってしまっていることがよくありますが、横浜がするのですから、横浜の血となり肉となり、情報にしても財力にしても、横浜の肥やしになる方向が望ましいですね。

森 東京の本社機能を横浜へ引っ張ってこい、という声が強いのですが、それだけでは何ということはないような気がします。

林 本社機能がただけでは、ただの引っ越しですね。

森 東京の力がつくだけですね。

大倉 林さんがおっしゃったように、地元の法人なり、地元企業をもう少し大切にしたい。また、地元企業をもう少し大切にしたい。「みなとみらい21」がここまで実現してきたことについては、地元がいろいろ貢献し

ているわけですから、まず、第一に地元の法人なり企業を育てることを考えていただきたい。それから外部からの資本が入るといふ順序だてにしないと、他府県資本に占領される恐れが出てくるのではないのでしょうか。

「地元をあそこへ移しても意味ないじゃないか」とおっしゃる方もあるけれども、今まで地元が貢献してきたからこそ新しい街が出現していくわけです。「みなとみらい21」をつくる以上、地元が核になっていかなければ、どこかの租界みたいになってしまふ。もう一度、地元企業に目を向けていただきたいと思えます。

先行投資としての仕掛けを

森 菅さんはどうですか。

菅 企業活動だけのまちでいいのか、ミニ東京化を懸念されるのは、ある意味でそういう部分ではないかと思うのです。

都心部の機能は、いろいろな情報の交換であつたりするわけですが、それには企業の経済活動情報だけでなく、まちとしてのいろいろな情報をそこに集積したり発信したりすることだと思えます。だからこそ「みなとみらい21」地区の中に国際会議場もでき、美術館もできるのだらうと思えますが、それは公共だけがつく

るのではなく、民間活力という言い方をさせていただきますが、民間の文化施設的なものを考えていくことも大切だろうと思っています。

これからは企業社会でなくなっていくわけで、個人の創造力が都市の活性化を推進するだろうと思っています。そうした場合には、文化施設のようなものが、昔風にいえばある種のサロンをつくっていくと思うので、そういう機能をもっと埋め込んでいくという考え方が大切になってゆくと思います。そうすることが、今のミニ東京化を避ける一つの方向ではないかと思うのです。そういうことが行われると、「みなとみらい21」が東京の副都心の単なる一部分になるのではなくて、独自性を持ったものになっていくのだらうという感じがします。

森 今見ておられると、企業だけの「みなとみらい21」という感じがしますか。

菅 短期的に事業を考えると、そうなりかねないという気がします。そうではなくて、横浜はいろんな制約条件があるけれども、日本全体としては豊かな時代に入っている中で、先行投資をどうやって引き出していくのかというあたりを、ああいうものの仕掛人としては考えていかなければいけないと思っています。都市の経営理念が必要だという気がしています。横浜はそういう可能性が十分にあると思えます。

森 Y E S以降の取り組みそのものはそこまできちんとやっているのですか、今はY E S一本ですか。

小林 商工会議所としても、Y E SはY E S、Y E Sにすべてかけていたのでは、終わった途端しばらくの間何にもなくなつたのでは博覧会が全く意味なくなるので、行政の方もいろいろ考えられているだろうし、経済界もあそこをどうすべきか真剣に論議しています。では具体的に何をするか、少なくとも博覧会期間中までに結論を出しておかないといけない。極端にいえば、パビリオンが壊されたら、次の槌音が出てくるくらいが必要があると思っています。

横浜全体の活性化を目指して

小林 もう一つ大事なものは、「みなとみらい21」は横浜の都心の一つの目玉でなくて、緑区にとつても瀬谷区にとつても、「みなとみらい21」との何らかのかかわり合いが出てきて、横浜全体が活性化するという方向でないといけない。単にあそこにビジネス街ができて、本社機能が集積したということではおられない。やっぱり機能だろうと思います。ある本社がそこへ来たことよつて、横浜全体が活性化するのならそれ大いに結構ですが、ただ大企業の本社を集めれば良いということでは終わつたので

は本末転倒になつてしまふ。横浜の企業があそこへ必ずしも移転しなくても、今のところにながら、「みなとみらい21」が活性化することよつて横浜全体の経済が活性化するならばそれでいいと思う。そういう機能の集積を是非してほしいと思っています。

単なるビジネス街に終わることなく、計画自身かそういう形になっていませんから、いろいろな機能が入ることになると思うのですが、緑区の人も瀬谷区の市民も企業も、何らかの形で「みなとみらい21」とつながる機能にしてぜひしたいという気がします。

外国人にとつても魅力あるまちに

小林 もう一つは、外国人の住宅のことです。「みなとみらい21」の中に一万人の居住人口を考えていますが、極端にいえば、一万人の外国人住宅をつくつてもいいのではないか、そのくらいの考えがあつてもいいような気がします。林 外国人にとつて横浜は非常に住みやすいと思うのです。「横浜らしさ」の中に考えていることの一つなのですが、外国人が横浜を歩いている、景色に溶け込んでいるというか、違和感がないのです。もちろん、中華街や山手地域が控えているということもあります。昔から外国人を見なれているということもあると思いま

す。かえつて東京の渋谷とか銀座を外国人が歩いていると、観光客かなという気がします。ですから、横浜にとつても、外国人が増えることよつて海外とのつながりができますし、外国人が横浜に住むことよつて、海外に対して望郷というより、横浜にかかわり合いを持つことよつてP Rにもなるだろう。もし「みなとみらい21」地域に一万人の外国人が住むようになれば、大きな意味で国際都市横浜の中の先端基地という役割を持って、それで横浜市全体に浸透していく、そういうのが見えるような気がします。

横浜のイメージを生かして

大倉 横浜はものすごく得な面があります。林さんがおっしゃつたように、「横浜」といっただけですべてが分かるのです。例えば「横浜倶楽部」にしても、横浜という都市はこうだから、こういうものが出来ましたといわなくとも、「横浜倶楽部」というブランドを出すだけで理解してくださるわけです。私も全国に店がありますが、その都市の名前をつけて何かをやるうとしたら、この都市はこういう生い立ちで、こうだからこういう物をつくりましたという説明をしなかつたら、何がだか分からないわけです。そういう意味では、「みなとみらい21」

にしても博覧会にしても、「横浜」といっただけでイメージは、パッと出てくるわけです。

若い連中に横浜ナンバーの車が人気あるのもそれでよし、私のところは練馬ナンバーだから子供達は嫌だと言うのです。横浜の車で他府県へ行きますとパッと注目してくれますね。横浜博覧会の高島屋パビリオンのコンパニオンを、オール高島屋から募集したところ、大変多くの希望者が殺到しました。横浜というイメージは、戦わずして格が違うわけです。

そういう意味では、街づくりをするにしても住宅づくりをするにしても、他よりは完全に差が開いていますから、それを大いに利用しなかつたら損だと思えます。外の人は、横浜にいいイメージを持っていますから、それを活用しない手はない。それは大変な遺産であり、未来へ残していく大きな財産でもあります。

例えば、丸の内は皇居がなかったらどうにもならない街で、背景に皇居があるからあれだけ引き立っているわけですね。横浜は海があります、東京も海があります。しかし、東京に海があると知っている人は、以外と少なくないようです。横浜に対しては、海というイメージを多くの人が持っています。ですから、海と文化の香りのある「みなとみらい21」。住宅は山手。背景は湘南や箱根と、イメージは完全にそろう

ていますから、これを盛り上げていけば成功は間違いないと思います。

森 外から見ているイメージの方が過大というか、我々横浜に住んでいる者以上に期待感があるような気がしてならない。それをいかにうまく活用していくかが横浜に住んでいる私たちの一番大きな課題ではないかという気もしますが、かといってイメージだけにおぼれていると、最初の話のように、どっちつかずということになりかねないのではないかと思います。

四——横浜のこれからの夢

森 今までいろいろお話しただいて、その延長上ということになりますが、横浜のこれからの夢、ユニークな夢を聞かせてほしいのですが、林さん、どうですか。

インターナショナルなまちに

林 夢というと、今の話の延長になるのですが、日本人の潜在心理として、インターナショナルにあこがれるのは、これから日本がどんなに国際化を図っても、当分続くというより、永遠に続くのではないかと思えます。ですから横浜がインターナショナルな都市になれば、全国から横浜に住みたい、横浜で働きたいということに

なり、「横浜」がステータスになる。大倉さんがおっしゃったように既にスタートラインは先行していて、若者の間で横浜ナンバー、それ一つとってもわかるように、一歩先んじている。そこを、これから「みなとみらい21」を基盤として発展させていくことによって、誰もが横浜に住みたい、横浜で働きたいという希望を持つようになるのではないか。そうすると既にあるプライドがさらに高まる、それが経済的にも活性化につながるだろうと思います。

ファッションは保守的、気性は開放的

林 ただ個人的に見ると、横浜の人は不器用で、非常に保守的です。ファッションにしても、ハマトラというように東京から見ると保守的で、非常に不器用です。

森 横浜は保守的ですか。

林 視点が違うんです。地方を基準にしてみると非常に進んでいます。東京を基準にすると、今一つかなという気がします。東京の進んでいる部分にあきた人から見れば進んでいるように見える。見る人によって進んで見えたり、遅れている都市に見えたり、微妙なところを横浜が揺れ動いている気がします。

日本自体が、よく国際社会でいわれるようにメンバーシップの国ですから非常に保守的で

すが、そういう視点からいくと、横浜は何でも受け入れ、開放された都市です。東京は日本人同士でも「隣は何をする人ぞ」という状況ですが、横浜は外国人がいても自然で、そういう意味では非常に進んでいる。

けれども、ファッションに関しては、意識するしないにかかわらず横浜カラーを持っている。よく女子校生の話がです。横浜の女子校に通っていると、カトリック系が多いからそういうイメージになるのかもしれないけれども、異国情緒があるし、石川町駅は全国で一番女子校生が乗りおりするんですね。その女子校生たちにとって、元町は卒業して大人になってまた戻ってくるまちです。私も商売上、元町の商店街SS会にかかわっていますが、単位は小さいが、一つの商店街としてはそれを活用していかないといけないと思っています。

マスのな面から見たときには、横浜で育った人が、何らかの事情で離れざるを得なくなっても、離れたくない、そういう現状ですから、将来は外から見たイメージだけが国際的ではなくて、中身の伴った国際的な都市を「みなとみらい21」にかけて、そういう都市に発展していったらいいなと思っています。

横浜の中の地域も自立を

森 菅さんはどうですか。

菅 横浜は国際都市という発展をしてもらいたいと思いますが、現在は横浜だけでなく、都市というものが主役になってきつつあるわけですね。昔は国家だったのですが、これからは日本の横浜でなくて、横浜という単独で世界にちゃんと通用していく、対外的にはそういう時代になりつつあるわけです。

今度は逆に、横浜の中をどうするのかといったときに、日本の中で一つのつぶつぶみたいなものとして横浜が自立していくとすれば、横浜の中もそれぞれの地域がもっと自立した形をとっていく必要があるのではないかと、それによつてさらに活性化していくことになると思います。

端的に言えば、区が自治区の機能を持つようには横浜はなっていくべきだろうと思っているわけです。東京も、それぞれの区が自主性を強く持つことによつて、世田谷とか墨田とか荒川とか、いろいろなところに活力が出てきています。それによつて東京全体が国際都市としての活力があると同時に、地場の活力も出てきています。それは自分のまちを自分で決めることが大切だということだということです。戸塚区にしろ緑区にしろ、ほかのまちなら、人口規模あるいはエリアからいっても、ちゃんとした市という単

位になっているわけですから、そういうふうには遠からずなつてほしいというのが夢です。

森 多心型というような意味ですか。

菅 さっき五つ申し上げましたが、中区だけが中心でなくて、幾つかの中心があつて、それが競争意識を持って、お互いに発展していった方が、横浜はもっと活力が出てくるだろうと思います。中区あるいは「みなとみらい21」、これは大きな中心ですけれども、それしかない。あとは従属しているのではなく、戸塚は戸塚なりにおもしろい、金沢は金沢なりにいい、といった具合に幾つかの芯を持ちつつ発展していく。都市としての形もそうだし、行政の運営の仕方もそんなふうになつていった方がいいと思います。

かけがえない港と市民生活の直結を

森 小林さんはどうですか。

小林 今までのいろいろ話があつた中で、横浜にかけがえないのは港だと思つています。全国的に港湾施設が増えているから、総体的なシェアの低下はやむを得ないと思うけれども、日本の中でも有数な港であることは、これからも維持し続けられるだろうと思っています。

ただ、非常に残念なのは、港というかけがえない施設を持っていながら、それが横浜市民

の生活と直結していない。これは、結果的に市内の経済機構なり経済機能問題とのかかり合いになるので、横浜港という港の機能を横浜市民と直結できる機構、特に「みなとみらい21」を中心にして進めていかなければいけないだろうと思います。

よくいわれる話ですが、カナダとかアメリカあたりから鮭が横浜に相当揚がっています。ところが、それはどこに行くかというところ、北海道へ直行して、北海道産鮭ということで横浜市民は買っているわけですね。アメリカの船会社あたりは、「それはおかしい。横浜で買えば安く買えるのに、わざわざ北海道まで送ってまた戻ってくる」と言っています。これは一つの例ですが、かけがえのない施設が横浜経済なり横浜市民に直結していく必要があるのではないかと。

もう一つ、物流にしても、人の流れにしても絶対量は飛行機と船とは比べものにならないのですが、空港は無視できない。商工会議所としても横浜空港問題を挙げていますが、超長期的に考える必要があるが、中期的には、例えば羽田の再沖合展開、羽田であれば横浜空港と考えるでも差し支えない距離だろうと思うし、また必ずしも東京湾内で考えなくても、神奈川県内に空港ということでもいいのではないかと。世界の

大都市の中で、国際空港が一つしかない、しかも首都圏に三千万人の人口がありながら、ほんとの意味の国際空港が一つというのは世界の大都市の中でまずないわけで、横浜市内という小さなものにとらわれなくて、可能性があるなら、例えば相模湾でもいいのではないかと。

空港と港、それに情報の港、この三拍子が横浜の将来を担う大きな要素ではないか、より現実的な可能性を探りながら考えていく時期ではないかという気がします。

成熟発信する都市

森 最後になりましたが、大倉さんはどうですか。

大倉 横浜というのは、開港百三十年、世界中の新しい先端の情報が入ってきて、日本全国に力強い情報発信をしていたと同時に、横浜なりの新しい情報が出ていたわけで、横浜は情報受信であり、横浜の社会の中でも一度新しい成熟発信をしていくべきで、これが都市の開発についても、世界に向けても、国内に向けても、横浜の成熟発信でなければいけない。

何も先端のものだけ発信するのではなく、都市づくりからいっても、生活からいっても、横浜らしい「みなとみらい21」をつくっていく、市民の生活からかけ離れた「みなとみらい21」

が出来ては意味がないと思うのです。市民の生活環境、横浜という環境を踏まえた上の「みなとみらい21」の開発であれば、必ず新しい成熟発信が横浜からできるのではないかと。その可能性は十分ありますので、それを期待しますし、私共も微力しながらお手伝いしていきたいと思っています。

森 今までのお話をお伺いしていると、「横浜らしさ」というのは、小林さんがおっしゃったように「らしさ」がないのが横浜らしさ、そういう意味では、林さんもおっしゃっていましたように、これから積極的に仕掛けてイメージをつくっていくことは、十分に可能である要素を持つておりますね。一つの固定化されたイメージで、それ以外に打って出るのが難しい状況から大変でしょうが、これから横浜のイメージをふくらませていくことがやりやすいという意味では、横浜はいい条件を備えているという気もしました。

郷土意識が低いということを裏返せば、来者拒まない、排他的な色彩が少くないという意味では、情報一つとってもどんな欲に受け入れる体質があるのではないかと、情報の発信基地としてはいい体質を備えているのではないかと、という気もしました。

菅さんもおっしゃっていましたように、一つ

のイメージだけにとらわれるのではなく、いろいろなイメージを組み合わせて、厚みのある横浜のイメージ、横浜らしさ、横浜の街づくり、都市づくりに結びつけなくてはいけないと感じました。

お話を聞いていると、これからの横浜は、おぼろげながら、こうあるべきだというものが何となく固まってきたような気がして、有意義なお話だったという気もしています。今日はいいご意見をたくさん聞かせていただいて、私も随

分参考になりました。
この辺で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。